

特別講演

Special Lecture

越中万葉の世界 —大伴家持と富山—

The Manyosyu poetry of the Etchu region: Poet Otomo Yakamochi and Toyama

*坂本信幸

高岡市万葉歴史館

富山県の「ふるさと文学」の一つとして、『万葉集』があげられる。

というのは、万葉集の編纂に大きな役割を果たした大伴家持が、天平 18 年（746）に越中国守として赴任し、5 年間に在任した間に 223 首もの歌を詠み残しているからである。

家持の作 223 首を含めて、「越中万葉」と称される歌数は 337 首を数える。万葉集全歌が約 4500 首であることを考えると、「越中万葉」の占める割合（約 7.5%）がいかに高いかが知られる。

万葉集所出の地名数も、奈良県の 897 をトップに、大阪府 218、滋賀県 145、兵庫県 142、富山県 140 と、近畿圏を除くと富山県の地名が最も多い。

「越中万葉」は、古代文学としての意義はもちろん、

- 1, 越中の風土
- 2, 越中のことば（方言・孤語）
- 3, 越中の風俗

など古代の越中地方の情報を豊かに残してくれている点において重要である。

しかも、越中万葉歌の残された巻は、大伴家持の歌日記のような巻であり、日時が記載された歌が多く、その実態に具体性がある。

そのような、越中万葉の世界を、代表的な歌を中心に紹介してゆく。

*Nobuyuki Sakamoto

Takaoka Manyo Historical Museum